

衣川挽歌 (松口月城)

孤影 惨たり 亡命の 客

百里 潜行 平泉に 至る

秀衡 義に 依つて 庇護すと 雖も

鎌倉の 威嚇 愈々 儼然

此処も 亦 安住の 地に 非ず

無情の 春風 衣川を 吹く

一夜 泰衡 孤館を 囲み

絶代の 英雄 北辺に 死す

年齒 時に 三十一

文治 五年 桜花の 天

義経の 末路 何ぞ 悲壮なる

数寄の 運命 史篇に 伝う

解説 源義経は数々の戦功をたてながら兄・源頼朝と仲違いし、追われる身となった。子供の頃に平氏に追われた義経は藤原秀衡の元で過ごした事が有り、頼朝から逃れる為、奥州に向かったが、秀衡の子・泰衡に討たれたことを詠った詩。

語釈 ※衣川 岩手県奥州市および平泉町を流れる北上川支流の一級河川である。衣川は平安時代末期まで、蝦夷の勢力と倭人の勢力とを分ける境界線の川であった。※孤影 ただひとり、ものさびしうに見えるかげ、または姿。※惨 かわれで見るにしのびないこと※亡命 迫害などの身の危険を回避するために逃亡し、庇護を求める行為。※潜行 人知れずひそかに行くこと。※平泉 東北地方、岩手県西部にある古くからの地名。※秀衡 藤原秀衡のこと。※庇護 かげいまもること。※鎌倉 源頼朝がいるところ。※愈々 ますます。より一層。※儼然 おごそかで重々しく、近寄りにくいさま。※安住 何の心配もなく、そこに落ち着いて住むこと。※泰衡 藤原秀衡の次男。※北辺 北の辺。北のはて。※年齒 年齢。※文治五年 元暦の後、建久の前。一八五年から一九〇年までの期間。※数寄 運命のめぐりあわせが悪いこと。※史篇 歴史。

通釈 兄・頼朝の恨みを買ひ、もの寂しく亡命した義経は、潜行しながら秀衡の元に辿り着き助けを求めた。秀衡は義に依つて庇護を確約したが、頼朝の威嚇はなお一層儼然とし、この場所も安住の地ではなかった。無情の春風が衣川を吹き散じた一夜、鎌倉の威嚇を感じていた泰衡は、義経の館を囲み、義経一行を襲撃し遂に義経は北の果てで命を落とした。時に年齢は三十一歳。文治五年の桜花の咲き乱れる季節であった。義経の末路は悲壮でこの事は歴史が物語るで有ろう。